

第7章 結論

7.1 はじめに

本論文では、従来不可能であるとされてきた状態述語文の他動化と使役化に着目し、その過程について私案を提示した。すなわち、「～くする」「～くさせる」構文、「～ようにする」「～ようにさせる」構文、「形容詞+める」「形容詞+まらせる」構文の3つの形式を、状態述語文の他動化形式・使役化形式として規定し、それらの形式を通じて、状態述語文の他動化と使役化を考察した。そして、その構文的特徴と意味的特徴を記述した。以下、7.2節と7.3節で考察の結果をまとめる。

7.2 状態述語文の他動化と使役化の構文的特徴

状態述語文の他動化は「する」によって、使役化は「させる」によって行われる。ただし、状態述語文を他動化・使役化するためには、その中間段階として変化の過程が介在する。そして、その変化の過程は構文的には「なる」という自動詞文の存在と結びつく。つまり、状態述語文は一旦状態変化を表す動詞述語文(自動詞文)に転換し、そして、その自動詞文から他動化や使役化が行われる。

この派生関係を図で示すと次の(1)～(3)のようになる。

- (1) a. YがZい。(状態述語文)
↓
b. YがZくなる。(自) → b'. XがYをZくさせる。(使役)
↓
c. XがYをZくする。(他) → c'. WがXにYをZくさせる。(使役)

(2) a. Yが ~を Vない。(「動詞+ない」など)

↓

b. Yが ~を Vなくなる。 → b'. Xが Yに ~を Vなくさせる。

↓

c. *Xが Yを ~を Vなくする。 → c'. *Wが Xに Yを ~を Vなくさせる

(3) a. Yが ~を Vない。

↓

b. Yが ~を Vないようになる。

↓

→ b'. Xは Yに ~を Vないようにさせる。

c. Xは Yが ~を Vないようにする。

→ c'. Wは Xに Yが ~を Vないようにさせる。

例えば、(1)において状態述語文の他動化とは(1a)～(1c)への過程を指し、状態述語文の使役化とは(1a)～(1b')への過程を指す。状態述語文(1a)は直ちに他動詞文(1c)や使役文(1b')につながるのではなく、(1b)の状態変化を表す自動詞文「YがZくなる」を経て、他動化「XがYをZくする」・使役化「XがYをZくさせる」へとつながる。つまり、自動詞文「YがZくなる」が介在することで、(1b)の「YがZくなる」と(1c)の「XがYをZくする」の自他関係が、(1b)の「YがZくなる」と(1b')の「XがYをZくさせる」の使役関係が成り立つ。なお、(1c)の「XがYをZくする」と(1c)「WがXにYをZくさせる」の使役関係も成り立つ。(2)、(3)においても同様のことが観察される。このように、「なる」と「する」の自他関係、「する」と「させる」の使役関係に加えて、新たに「なる」と「させる」の使役関係を想定することにより、従来の「する」と「させる」の使役関係では説明できない「する」と「させる」の関係を、「なる」との自他と使役の関係から説明することができる。

以上のような状態述語文の他動化と使役化における自他と使役の関係は、次の(4)のように自他対応を有する動詞における自他と使役の関係と平行している。つまり、次の(4a)の「集まる」と(4b)の「集める」は自他関係に、(4a)の「集まる」と(4a')の「集まらせる」は使役関係にある。ここで、「集める」と「集まらせる」の対立は、「～くする」と「～くさせる」の対立や「～ようにする」と「～ようにさせる」の対立と平行している。

- (4) a. 学生が集まる。(自) → a'. 先生が学生を集まらせる。
 b. 先生が学生を集める。(他) → b'. 私は先生に学生を集めさせる。

7.3 状態述語文の他動化と使役化の意味的特徴

状態述語文の他動化と使役化の意味的特徴に関しては、大きく3つの問題がある。一つは、状態述語文の他動化形式・使役化形式である「～くする」「～くさせる」構文、「～ようにする」「～ようにさせる」構文、「形容詞+める」「形容詞+まらせる」構文がそれぞれどのような意味的特徴を持っているか、そして、その意味的特徴に基づきそれぞれの形式は互いにどのように対立しているかである。二つ目は、各形式には制約がある場合があるが、その制約はどのようなものか、三つ目は、どのような場合に他動化が選択され、どのような場合に使役化が選択されるかという他動化と使役化の選択原理の問題である。

まず、各形式が持つ意味的特徴と各形式の対立関係についてまとめる。次の<表1>は状態述語文と他動化形式・使役化形式との相関関係を示したものである。

形式 状態述語文	～くする	～ようにする	形容詞+める
	～くさせる	～ようにさせる	形容詞+まらせる
形容詞・形容動詞			
名詞+だ	○	×	○
動詞+ない			
動詞+やすい/にくい	△	○	.
動詞+たい			
状態動詞	.	○	.

<表1>

○=成立する △=成立に制約がある ×=成立しない . =該当なし

「～くする」「～くさせる」構文、「～ようにする」「～ようにさせる」構文、「形容詞+める」「形容詞+まらせる」構文は、意味的には主語が目的語に働きかけて目的語をある状態に変化させることを表す。ただし、各形式は互いに対立している。つまり、「～くする」「～くさせる」構文と「～ようにする」「～ようにさせる」構文は、前者が他動化

・使役化の結果を含意するのに対して、後者が未実現の状態変化を表す、すなわち他動化
・使役化の結果を含意しないという点で対立している。また、「形容詞+める」と「～くする」構文は、前者が変化の過程に焦点が置かれる表現であるのに対して、後者は変化の結果に焦点が置かれる表現であるという点で対立している。

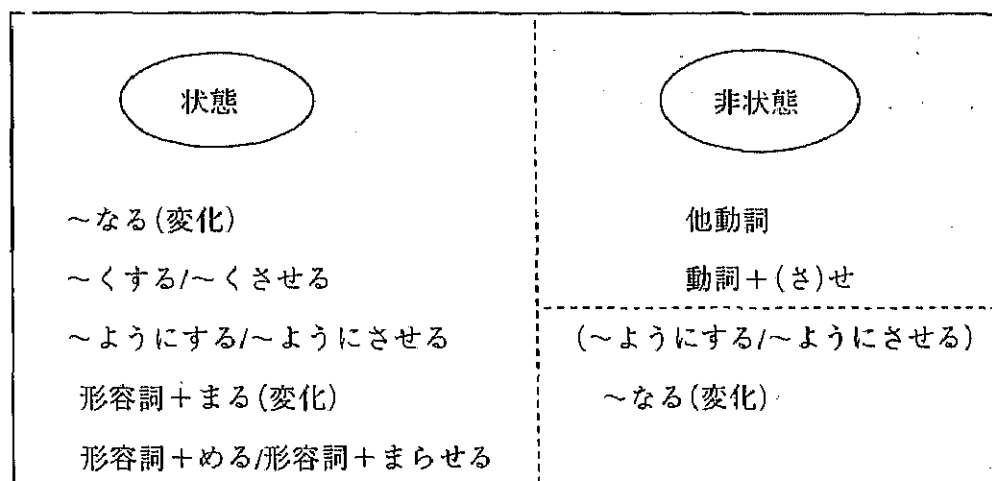
次に、状態述語文の他動化形式・使役化形式が持つ制約に関してまとめる。「～くする」「～くさせる」構文は否定文「動詞+ない」や難易文「動詞+やすい/にくい」、願望文「動詞+たい」に対して制約を持つ。最も強い制約を持つのは否定文「動詞+ない」の場合であり、否定文「動詞+ない」の他動化・使役化においては「～くする」「～くさせる」構文が成立する場合と成立しない場合がある。そこで、否定文「動詞+ない」の他動化・使役化の成立には条件が必要となる。その成立条件とは意味的条件と統語的条件である。意味的条件とは、「動詞+ない」が主語名詞句の状態や性質・属性を表すこと、すなわち状態性を持たなければならないということである。統語的条件とは、「動詞+ない」における動詞が一項述語でなければならないということである。難易文「動詞+やすい/にくい」や願望文「動詞+たい」の他動化と使役化においては、これらが意味的条件を常に満たしているため、統語的条件が成立にかかわる重要な条件になる。また、「～ようにする」「～ようにさせる」構文は、述語が形容詞・形容動詞、「名詞+だ」で構成される状態述語文は補文に取れないという制約を持つ。これは「ように」の最も抽象的な意味が「……の状態である」「……と同じ様子である」であることから、すでに状態を表す状態述語文と状態を表す「ように」が相容れないからであると説明できる。

最後に、他動化と使役化の選択原理に関してまとめる。他動化と使役化の選択原理は他動性と使役性の違いに帰結する問題である。つまり、他動詞文は主語のコントロールが働きかけの段階と変化の段階の両段階に及ぶことを表す形式であり、使役文は主語のコントロールが働きかけの段階にのみ及び、変化の段階を引き起こすのは被使役者自身であることを表す形式である。したがって、他動詞文を用いるか使役文を用いるかという選択原理は主語のコントロールの範囲と密接なかわりを持ち、その主語のコントロールの範囲は働きかけの対象が有生物であるか無生物であるかなどの要因とかわりを持つ。

「～くする」「～くさせる」構文の場合をしてみると、述語が形容詞・形容動詞、「名詞+だ」で構成される状態述語文の他動化・使役化においては、他動化と使役化の選択原理は「X」「Y」の有生・無生と「X」のコントロールとの相関関係に基づいている。「X」の意味役割が動作主で、「Y」の意味役割が対象である「動作主型」では、主語のコント

ロールが働きかけの段階と変化の段階の両方に及ぶため、他動化が選択される。また、「X」の意味役割が原因である「原因型」では、「Y」の意味役割が対象の場合は他動化が、「Y」の意味役割が経験者の場合は使役化が選択される。さらに、原因型においては「する」と「させる」の両方が選択される中和現象が観察されるが、この問題には「Y」の性質や「Z」の性質がかかわっている。否定文「動詞+ない」の他動化・使役化における他動化と使役化の選択原理も「Y」の有生・無生と「X」のコントロールとの相関関係に基づいている。「～ようにする」「～ようにさせる」構文の場合を見てみると、「～くする」「～くさせる」構文の場合と同様に「Y」の有生・無生と「X」のコントロールとの相関関係が基本的には関係している。ただし、「～ようにする」構文では「Y」の有生・無生の制約が見られないが、これは「Y」が「が」格で標示されるという「～ようにする」構文の特徴に起因すると考えられる。「形容詞+める」「形容詞+まらせる」構文の場合にも、他の構文と平行した選択原理が観察される。

以上のような状態述語文の他動化と使役化の考察の結果を踏まえて、他動化と使役化の全体像を描いてみると次のようになる。



＜他動化と使役化の全体像＞

命題を状態と非状態に分けるなら、図で示したようにそれぞれの命題には他動化形式と使役化形式が存在する。状態の他動化形式・使役化形式としては、「～くする」「～くさせる」構文、「～ようにする」「～ようにさせる」構文、「形容詞+める」「形容詞+まらせる」構文がある。非状態の他動化形式・使役化形式としては、他動詞構文や「動詞+(さ)せ」構文がある。そして、「～ようにする」「～ようにさせる」構文がある。このように

他動化と使役化の全体像を見渡してみると、状態か非状態かという命題の区分が他動化と使役化の形式を分ける分岐点になっていることが分かる。これには、命題を表す形式が形容詞に属するか、動詞に属するかという形態的な側面も関係している。

7.4 今後の課題

今後の課題としては、まず、「なる」の使役形である「ならせる」に関する問題がある。本論文では、「ならせる」の使用例がほとんど見当たらないという事実から、「ならせる」の補充形として「させる」を想定した。そして、「させる」が「ならせる」の補充形として見なされる根拠とそのようになった経緯について考えてみた。しかし、「ならせる」は「医者にならせる」のようにごくわずかな範囲ではあるが、使用可能な状況がある。今後、このような点を含め、「なる」の使役形「ならせる」にどのような制約が働いているのかということを実証し、その上で本論文で提案している補充形「させる」とのかかわりについて分析していきたい。

次に、「～くする」「～くさせる」構文と結果構文との関連性に関する課題がある。「～くする」「～くさせる」構文は結果構文と類似した側面を持っている。特に、本論文であげている動作主型の「～くする」構文における「する」は、他動化形式としての機能の他にも実質的な意味を持ち合わせていることから、結果構文に接近している構文と考えられる。

最後に、日韓対照研究がある。韓国語研究においても、日本語研究と同様に他動化と使役化の研究はこれまで主に非状態を中心として行われてきた。そこで、今後韓国語における状態述語文の他動化と使役化を構文的側面と意味的側面から考察し、最終的には、日本語と韓国語における状態述語文の他動化と使役化について対照研究を行ってみたい。